

Special Essay

「ローマ人の物語」に思うこと

先端癌治療研究センター 鳥村拓司

先日約3年かけて塩野七生氏の「ローマ人の物語」を読み終えた。この小説は約2800年前のロムルスとレムスによるローマ建国(これは神話であり本当のところはよくわからない)から最後はローマ帝国の分裂、西ローマ帝国の滅亡までを描いた一大エンターテインメントである。ローマ帝国は当初キリスト教を弾圧したために、キリスト教徒つまり、ヨーロッパ人の目から見ると往々にして悪の帝国として描かれることが多い。塩野氏は宗教には寛容な日本人の目で古代ローマ帝国を非常に好意的かつキリスト教により支配された中世ヨーロッパよりも進んだ国家としてとらえている。同じローマ帝国について記述するのでも作者の考え方一つでその内容は全く異なったものとなる。歴史的事実は一つしかないのであるが今となっては確認しようがない。ユリウス・カエサルがルビコン川を渡るときに本当に「賽は投げられた」と叫んだかはタイムマシンで時代を遡りカエサルにインタビューするしか確かめようがないのである。

本は確かに多くの情報を教えてくれる。しかし一方で、そこに書かれていることすべてが真実かのように信じ込ませてしまう魔力も潜んでいる。我々は子供のころから本、特に教科書に書かれていることや学校で先生から教わったことはすべて真実であると思い込んでいる節がある。これは教える側からすると非常に都合のいいことであるが、本当に正しいことなのだろうか。特に医学教育においては現在真実と考えられていることも常に疑ってみることの重要性を教えることは大切なように思う。我々は過去に既成概念にとられるあまり重要な疾患や研究における重要な事実を見逃した経験はな

いだろうか。おそらく多くの人が思い当たる節があるのではないだろうか。

ノーベル医学賞を受賞された山中伸弥教授の iPS 細胞作製は「成熟した細胞は未分化な細胞に戻ることはない」という概念に縛られていたら決してなしえなかった仕事である。日進月歩の医学の世界では新たな発見により今まで正しいと信じられていたことが誤りとなったり、反対に否定されていたことが一躍真実として脚光を浴びたりすることは起こりうると思われる。将来の優秀な臨床医や研究者を育てるには、学生に対し教えられたことを鵜呑みにして覚えるという作業よりも教えられたことの真偽を疑ってみるといふ作業を教えることが重要であり、私自身もあらゆることに疑いの目を向ける柔軟な頭脳を長く持ち続けたいと考えている。

